

# Ⅲ 高校1年の英・数及び中学3年の英語に おける本年度の試み（経過報告）

倉 田 有 邦

## 1. 高校3年における従来からの英・数のクラス編成

全国的に進学率が上昇し、さまざまな能力・学力を持った生徒が高校へ入学するようになった。本校の高校の方についていえば、抽選入学した附中からの出身者が半数以上を占めている関係上、学力の上下の開きは相当なものであり、現在大学区制を採用している愛知県下のいかなる高校にも見られないような、多様な学力層をかかえているわけである。

このような学力の多層化を最も鋭敏に感ずる教科は英語と数学である。本校では、抽選入学実施当時から、高校第3学年において英語の一部に能力別編成をとり入れ、数学では、進路に応じた教科内容をとり入れるなどして、何らかの形で学力に応じた適切な指導ができるような配慮がなされてきた。これらの事柄については過去数年間に、あるいは研究紀要に、あるいは研究協議会に発表してきた通りである。

## 2. 高校1年における本年度の試み

本年(昭44)は従来からのやり方をもう一步押し進めて、第1学年から英数能力別編成を実施した。この背景には、年々増大する、外部中学出身者と附中出身者との学力差、それに伴う成績下位生徒の教科不適應、それに相変らずの大学入試競争などが挙げられる。これには無論反対もあった。反対の多くは、やはり「能力別」ということ自体の持つ差別性への警戒からであり、それに、時間割編成や教科担当上の余計な手間などもその根拠となった。しかしこれには、過去8年間にわたる、高3での実績がある程度ものをいった形となった。事実、従来の高3での能力別あるいは進路別編成にはほとんど反対らしきものは存在せず、その成果についてはある程度実証されていたのである。

ともなくこのような事情で、本校としては始めて、第1学年からの能力別編成授業が行なわれることとなった。ただ、これには、時間割編成上の制約ばかりはどうしようもなかった。結果「英数だき合わせ」の能力別編成となったのである。もちろんこれには、英語と数学との学力の相関は非常に高いという前提が、当然のこととして了承されていた。

第1学期は、入学当初行なった愛知県下の英数一斉

テスト、及び四月下旬に行なった本校だけの英数一斉テストを合わせ、入試成績(英・数の)も加味して五月上旬から能力別編成を実施した。(それまでの3週間ほどは、普通のホームルーム編成で授業をやっていた。)

この時すでに、英数の相関が思ったほど高くないこと、ボーダーラインの者の処理のむつかしきなどが感じられた。しかし何分にも始めての試みであり、何とか編成を終えて実施となったわけである。その後、第1学期末に、中間及び期末テストの点数により、編成変えを行なった。編成変えについては、当初は必ずしも予定していなかったのであるが、中間期末テストの結果が、予想とはかなり違った成績分布を示し、各自の学力を最大限に伸ばすという、この編成の真のねらいが達せられないと判断したからである。またこの第1学期間は各科目(英Reader, 英Grammar, 英Composition, 代数, 幾何)とも進度をそろえることに留意した。出発した当初からいわゆる差別意識を持たないようにとの配慮であった。しかるに1学期末ごろのあるホームルームでの討議に、この英数の編成のことがとり上げられ、英数だき合わせの不合理的なこと、及び、どのクラスでも同じ教え方をするのなら、この編成は何の意味も持たず、優越感と劣等感をおおるだけだとの意見が出された。

第2学期には、1学期とはやり方を一部変えた。前記のクラス変えの結果、全体の約40パーセントが入れ変わり、特に中位に当たるβ組では大半が入れ変わる結果となった。授業については、特に先学期の一部の生徒の声も考慮し、それに事実上の授業の効率の上からも、必ずしも進度をそろえる必要はないと判断し、まず英Rはクラスによって進度や説明を変えることに踏み切った。代数は教科書の進度はあわせながらも説明の仕方、副教材の扱いなどでやはりクラスの実情に応じた方法をとった。それに対し、英G、英C、幾何は第1学期同様、同一歩調で進む方針を貫いた。これは、能力別編成を前提とした場合の生徒の反応を見るのにちょうど都合がよかった。

第2学期の終りに、このクラス編成について生徒の意見や感想をまとめる目的でアンケートを行なった。次に示すのはその結果である。

### 3. 英数クラス編成についてのアンケートの結果とその考察

対象：高校1年全員（上位群 $\alpha$ 組46名，中位群 $\beta$ 組46名，下位群 $\gamma$ 組39名計131名）

実施時期：昭和44年12月中旬

#### A 学習能率上の効果について

- ア. 効果あり
- イ. 変わらない
- ウ. かえって効果少ない

	$\alpha$	$\beta$	$\gamma$	計
ア	11	4	21	36
イ	29	33	6	68
ウ	6	9	11	26

(不明1)

この項目では、「感情面は抜きにして」とことわっておいた。従ってこの編成への賛否は別にして、まずわれわれの第一のねらいであった学習効果の有無を自己判断させたものである。

この項目の結果で一番目立つのは、 $\alpha$ ・ $\beta$ に比べ、 $\gamma$ では「効果あり」と感じている者の割合がかなり多く、一方「効果がマイナス」と感じている者もやや多く、中間の「効果変わらず」とする者が著しく少ないことである。学習能率の点でプラスと認める者が下位群に多いのは、いわばわれわれの意図していたところであるが、半面マイナスと感ずる者の割合も無視できないのは、やはり、心理的影響のシャープなあらわれであろう。とにかく $\gamma$ 組での「分極化」は注目する必要がある。それと同時に $\alpha$ ・ $\beta$ で「変わらない」と感じている者が断然多いことも（実情はかれらにわかっていないとしても）留意しなければならないであろう。

#### B 意識上の問題について

- ア. 励みになる，安心する
- イ. 励みや安心も覚えるが抵抗も感ずる
- ウ. 抵抗を感ずるのみ

	$\alpha$	$\beta$	$\gamma$	計
ア	3	2	5	10
イ	36	33	27	96
ウ	5	10	5	20

(無記5名)

このような編成に必然的に伴うと思われる心理的影響を見たかったわけであるが、大体予想通りの結果であった。大部分の者は励みや安心感も感じながら、抵抗もある——むしろ後者の方がやや強い——といったところである。

#### C (上記A・B及びその他の条件を総合した上で)

現在のクラス編成をどう思うか

- ア. ちょうどよい
- イ. 現状ではやむを得ない
- ウ. どちらかというところ反対
- エ. 絶対反対

	$\alpha$	$\beta$	$\gamma$	計
ア	1	4	3	8
イ	8	11	15	34
ウ	30	24	15	69
エ	7	7	5	19

(無記1名)

あらゆる条件を考慮に入れた上での、総合的判断を求めたわけである。全体的に反対が多い。特にアのような積極的賛成はごくわずかと見てよい。ただ、下位群ほど賛成——大部分は消極的賛成のイ——がふえており、 $\gamma$ では半数近くに達しているのは、Aで見たように効果・能率の面を認めざるを得ないからであろう。いずれにせよ、現行の編成に否定的な考えを持つ者が全体の三分二を越えていることは注目に値する。従来から高3において実施している、英語の一部の授業での能力別編成の場合には決して見られなかった現象である。なぜこのように反対が多いのかは、次のアンケート項目である程度理解できる。

#### D (上記Cの項目でウ・エに○印をつけた者、つまり現行の編成に反対の者だけが答える)

##### 反対する理由は

- ア. 英・数組み合わせのやり方では不合理だから（英・数別々ならよい）
- イ. 現状では効果が上がっていないから
- ウ. 分けること自体に反対である。学習上の能率などは問題外だ。

	$\alpha$	$\beta$	$\gamma$	計
ア	15	15	9	39
イ	6	8	6	20
ウ	15	7	3	25

全体の約三分二を占める反対者の、反対理由を分析してみたわけだが、これで見ると各クラス間でいくらか差異がある。

ア.の英数組み合わせが不合理だとする者が39名に達しているが、これはアンケート用紙にも明記しておいた通り、実質的には能力別編成そのものを否定するのではなく、むしろ英・数別に行うとよいとするものであり、やり方次第で肯定側にまわり得る人数であ

る。もし本年度のこの試みを、英・数別々にやっていた、これらの人数が賛成の方にまわっていたとすれば、Cの項目での賛否の比率は大巾に変わっていたものと思われる。前にもふれたように、英数の学力の相関があまり高くないことは第1学期当初から感じられていたが、その後もその傾向はいっこうに変わらず、特に英・数成績のバランスの著しく不均等な生徒にこの編成への不満がかなり大きいことが確認されている。

イ.に○をつけた者、すなわち、効果が上っていないことを理由に反対している者については、一応こういう編成の善意を理解しながらも、やはり感情的にひっかかりを覚える気持が働いているものと考えられる。したがって、やり方によっては賛成側にまわる可能性もあるが、次のウと同様の考え方も否定できないという層であろう。集計には入れなかったが、イとウの中間的な意見として、「ウのように学習上の能率を度外視まではしないが、能力別編成では学習上明らかにマイナスである。」という趣旨の注釈を加えた者が3人いた。選択肢作成上、この点やや不備だったかもしれないが、このあたりの層の気持をよく表わしているようである。

ウ.が最も純粋な意味での、能力別編成反対者の考えといつてよからう。ここでは全体の人数は比較的少ない(25名)が、明らかに上位群ほど多くなっている。ある程度予想したことではあったが、Aの項目で「効果あり」としている者の中にも、Cの総合判定では「絶対反対」の立場をとり、その理由にこのウを選んでいる者がかなりいる。中には「自分たちはいいがγの人たちに気の毒だ」とわごわざことわっている者もあった。「いかに理屈をつけてもこれは明らかに差別教育で云々」といった調子の感想がα組の者にかなり見受けられる。(感想を書く欄が最後に設けてあった)これについてはいろいろな見方が出来よう。善意に解釈すれば下位の者への思いやりともとれるであろうが、それならば「被害者」であるはずの下位群ほど反対者が少ない事実をどう見るのであろうか。実態をよく知らない者の、たてまえだけで事を論じようとする傾向のあらわれとみることはできないであろうか。また英Readerの授業で著しく進度が異なる(従って定期テスト範囲も異なる)ことに「差別」を感じている感想がある半面、第1学期にも一部の生徒の発言にあった如く、英Grammarや幾何で各クラス間の歩調をそろえていることに対して「何のためにクラス分けしたのかわからない」という感想もあり、この編成についての反対理由も細かくみるといろいろ異なった視点から出ていることがわかる。

いずれにせよ反対が全体の約三分の二を占めている事実は、本年度の試みとしては失敗であったというべ

きであろう。まだ第3学期を残しているが、再検討を要する問題である。

#### 4. 中学3年の場合

ここで本年度の中3の英語の授業のことについてふれておきたい。高1の新しい試みと並行して、中3でも英語の授業において、本年度は変わった試みを実施した。ただしこちらの方は能力別ではなく、1クラス当たりの人数を減らす試みをやったのである。本来2クラス85名の生徒を三等分し(28, 28, 29名)3クラス同時展開で時間割を組んだ。高校時代の英語の学力が中学時代のそれに大きく左右されており、学年が進むにつれて開きは大きくなる一方であることは、だれの目にも明らかなことであるので、高校におけるいわば対症療法的な能力別編成と対応して、まだ開きの小さい——とはいっても相当なものであるが——中学時代に一つの試みとして小クラスでの授業を行ない基礎力を少しでも固めようというねらいであった。この趣旨からすれば更に低学年の方がいっそう理にかなっているわけであるが、やはりそこは、高校入試を目前に控えた中3の方を優先させることになった。

外国語の授業で小人数ほど能率がよいことは定説である。3クラスを担当した3人の教師(筆者も含む)はたしかに授業のやり易さを感じた。50名近くを相手にしている高校の授業に比べれば、教師の目もよく行きわたり、指名も多くなり、説明もより徹底し、生徒の掌握が深まった感じである。ただそれが、どの程度授業能率、すなわち生徒の学力向上に寄与したかは資料不足のため不明である。実力テストで、昨年と同一問題を出したら、ほとんど同一結果が出たことはあったが。

この中3に対しても、2学期末にアンケート調査を行なった。質問項目はA.現行のやり方でよいと思われる点、B.悪いと思われる点、を箇条書にさせ、次にCとして、以上のA、Bを総合した上で、ア.たいそうよい、イ.まあまあよい、ウ.(2クラスの場合)変わらない、エ.むしろよくない、オ.ずっと悪い、の5段階に分けて評定させてみた。Aの項目では、ちょうどわれわれ教師が感じている通りのことを大半の生徒が書いていた。Bの項目では、これまたわれわれも予想していたことではあったが、3人の進度がかなり違い違っていたこと、そこから来る妙な被害意識(早く進んだクラスでは早過ぎてわかりにくいと言い、おそいクラスでは、他クラスよりおくれるので心配だという風に自分たちの方を悪くする傾向、それに試験が同一問題のため、それぞれのクラスでは得をしたとかいった、われわれの方から見れば、根も葉もない臆説)がやはりかなり多くの生徒(進度が不ぞろいなこ

とは、大部分の生徒)によって挙げられていた。そしてCの総合判定の項目では、ア.5名、イ.42名、ウ.16名、エ.15名オ.5名となり、ア.イ.合わせて賛成意見47名(57%)で、反対意見はエ.オ.合わせて20名(24%)、他はどっちつかずで19%というわけである。賛成が多くてまずまずといったところであるが、これは高1の場合と違って等質編成でしかも小クラスというわけで、生徒の意識感情を刺激するような要素は何もなく、恵まれた条件を与えられた上でのことなのだから当然なことであろう。むしろ反対意見を持つ者が24%もいることの方が問題かもしれない。進度が少々不ぞろいだったことが、実際以上に生徒には不安を与えたようであり、われわれの反省材料となった。

### 5. 今後の課題

以上が高1と中3の本年度における試みの実情である。大ざっぱに言えば、高1の場合は失敗、中3の場合はまずまず成功といえようか。しかしいずれの場合

にも、元来はより効果的な授業をして生徒の学力を最大限に伸ばそうという善意から出た試みだったのである。そのためかなりの時間と労力が教師の側からかけられているのであり、最初の意図が何らかの形で成就されるように持って行きたいものである。高1の本年度の試みが評判のよくない原因の一つが、英数学力の相関が思ったほど高くないにもかかわらず、だき合わせの形の能力別編成を行なった点にあることはすでに述べたが、その点を改善して別々に編成したとしても、従来高3でやっている編成ほどにスムーズに受け入れられるとは考えられない。入学当初の張り切った気持ちに冷水を浴びせられたような感じを、一部の生徒はどうしても抱くらしいのである。このような感情に対処するためには、ともかく誠意を持って指導に当たるほかはないと考えられる。このようなクラス編成が結局は彼ら自身のためになっているのだということを肌で感じさせることが大切であることを痛感する。

(附表) 英・数成績相関表 (英は Reader 及び Grammar and Composition, 数は代数) 及び幾何の評価を合計したもので各評価10段階

数 学	英 語	2	4	6	8	10	12	14	16	18	20
		3	5	7	9	11	13	15	17	19	
20											
18 ~ 19								1			
16 ~ 17					1	1	2	2	1	1	
14 ~ 15					4	2	1	3		1	
12 ~ 13					2	2	4	5			
10 ~ 11				5	6	6	4	2	4		
8 ~ 9				6	6	10	6	1	2	1	
6 ~ 7			3	5	3	6	5	1	1		
4 ~ 5		1	1	3	1	1	3			1	
2 ~ 3		2		3	1						

相関係数 0.46